

辨榮聖者
光明大系

無對光



密王克佛

尔生吾始乃世所主

集王堂

三月廿二日

王克乃克佛

是三月廿二日

乃克佛

清浄光佛

如来

浄光

如来

如来

如来

如来



如来

如来

如来

如来

如来

多やまに
ふくらむ

乃光の

如來の

如來光佛



釋悦法喜

深妙なる

香樂

さくら

さくら

前 篇

(目次は最後に)

絶對無限の光明に

攝化せられし終局には

諸佛と等しき覺位を得

大般涅槃に證入す

信仰の大意

ひそかに宗教の宗教を案するに、宗教は天人合一または大小二我の調和にありと。よりて之を見れば、如來の本體は物心不二の、毘盧舍那(びるしゃな)、宇宙の大靈にて、即ち絶對の大我なり。一切衆生は其の分子にて、即ち小我なり。されば如來大我と衆生小我との親密に合一する所に信仰は成り立つものとす。

我が教祖釋尊は、もと久遠實成(くわんじつじやう)の無量壽佛にましますと、迹を地上に垂れ給ひ、生を淨飯(じやうはん)の王家に受け、つとに無上の道意を發し、山に入つて道を修すること六年、つひに菩提樹下に於て金剛座上に座し無明永夜(むみやうや)の眠さめて正覺(しやうかく)の光明徧く十方を照し、頓に生死を超えて永恒不滅の涅槃を證り給ふ。

正覺(しやうかく)とは即ち本覺の無量光と合一したる相すがきにて涅槃(ねはん)とは即ち常住の無量壽に歸一したる義に外ならず。されば教祖佛陀の教旨は衆生をして無明の眠より醒まし正覺の光と爲し、生死を

離れて涅槃の常樂を得しむるにあり。若し之を宗教的に象徴せば本覺無量光如來の光明徧く十方世界を照し、信念の衆生を攝取(まきめ)給ひ、衆生至心に歸命して如來の光明と合ふ時は、如來正覺の光明が即ち我心光と成りうれば、諸佛の正覺(まこと)と等うし、又凡夫の小生命を大我(おほなごころ)の無量壽に投歸する時は自ら諸佛の涅槃と同一に歸す。こゝに於て衆生無明(むみやごころ)の闇は如來の覺光に照され、凡夫生死の苦は佛陀の常樂に化せらる。

吾らが信仰の宗致とする所は、如來の光明を獲得(えとく)し、罪惡の我が死し聖(まこと)き我に更生(よみがへ)り、光明の生活に入つて、聖旨を現す行爲をなすにあり。もと如來は一切衆生(しんじゆ)の大ミオヤにて我らは悉く子なり。されば吾らは如來(なごころ)に受けたる佛性と衆生性の煩惱(ぼんごころ)を具有す。衆生煩惱我が跋扈(ぼつこ)して罪惡を恣(しじ)にす。故に道を求むるには自己の罪惡深重なるを自覺し、一心に如來の心光を仰ぎ、光明名號を稱へて、つねに憶念して止まず。然る時は信念内に煥發し、大なる恩寵に攝護せられ、如來心光我に入り、我如來に同化せられ、罪惡の我は清き靈心に更生(よみがへ)り、如來を離れて我なく、我は是れ如來(なごころ)の子なりと覺(おぼ)する。ミオヤを離れて子の成長することは不可能なれば寤寐に如來を憶念し、我生命は全く無量壽(むりやうじゆ)に歸一したるものなれば現在を通じて永遠にまで共

にし、如來の命令に行爲し、私のはからひを捨て、一切は大ミオヤに一任して生活すべきものなり。

至心に念佛す

至心に如來を念じて心一境に住まとむ。我如來心光に入り如來心光我を攝まきむ。如來心光の外に我なく我如來心と合一す。聖法然ほうねんの、阿彌陀佛と心を西に空蟬うつせきのもぬけはてたる聲ぞ涼しき、の道詠ならひて念佛三昧を修すべし。佛我無二の妙境に入つて、靈感極りなきを得ん。之を念佛三昧又靈光三昧と云ふ。

念佛三昧

宗教は自己のみにては成立せぬ。即ち主體と客體との關係、人の信仰と如來の恩寵の關係にて、吾々子供は如來の大慈悲なる親の恩寵の育てに依らざれば成佛は出來ないのである。

人は小天地である。小天地の中に我と云ふ精神、自我の我があるから生きて居ります。併し宗教ではさう云ひませぬ。小さき我と云ふものは大我に對して小我と云ひ、宇宙全體の絶對無限の大我を佛教では「ビルシヤナ」と申して、其絶對なる大宇宙を指して、丁度小天地に我ある如くに、宇宙全體が大我であります。絶對無限の大我、即ち我々の大きな親であります、それが吾々の信仰するところの如來の本體である。しますると我々は子供なので、其の故は、形の方から申せば、我々の身體は其原料はどこから仰ぎしやと云へば、宇宙にある所の元素が集つて此身體を構成して居るのである。故に宇宙の一分子である。即ち宇宙は大我であります。大我の如來は小我の衆生と親密なる關係によつて宗教は成り立つものであります。大我と小我との調和即ち親の心と子の心の合一する所である。

此の身體だけのものならば小さなもので地球てふ一惑星に寄生せる微蟲に過ぎざる實にはかなき生物である。然れども進んで吾々の深奥の精神を開發する時は、絶對の大靈と吾々とが合一しますと、實に廣大無邊際の靈物である。即ち親と子との心が一つになり、永遠不滅の生命なるを自覺することが出来ゝ。然らばいかにして之が可能になるかとなれば、即ち吾人の主義では、念佛三昧の法を以て其の實が得らるゝのです。

念佛三昧とは親の佛心と子なる衆生心との合一する心的状態なのである。さてそれは如何にして得られましやうか。即ち信仰であります。こゝに又注意すべきことは、宇宙全體が如來の本體ではあるけれども、其の中心がある。其の中心が即ち我々が本尊と仰ぐのである。人間も身體全體に精神が充満すれども大脳に中心がある。丁度國に天皇陛下が在すごとく、我々に中心ある如く、宇宙全體が親であります。其の中に中心があります。それを認めて自分の中心と親密の關係が成り立ちますと、如來の恩寵、親が子を愛する如く、力を此方に與へてくれます。それを受けるが信仰であります。それを華嚴經華嚴經に斯う云ふ風に譬へてある。日光あり眼目ありて能く物が見ゆる如く、人に信仰あり、如來の光明と人の信仰との感應によつて宗教心は成り立つのである。

如來の光明は宇宙全體に遍く照りわたれる大靈光である。而して如來大靈光は人に信仰てふ眼なければ感ずることが出来ぬ。丁度盲人は太陽の光の感じのないのと同じで、如來の眞理の光は本來宇宙に満ちて居るけれどもわかりませぬ。又水月感應の譬の如く、天に皎潔なる月は照せども洋々たる水のなき所には感應せぬ。若し人に清淨なる信水充つる時は如來の靈月必ず感じらるゝ。本來如來即ち神は實在するとか又實在せぬとかの問題でない。自分が感じ得べき信心が有るか無いかのことに歸す

るのである。自分の信水淨まらざる時は感じらるゝわけはない。

元來宗教と云ふものは、大きな親の心が子供の心に感應して、而して親の圓滿なる靈徳の心に同化せらるゝものである。

親の目的

釋尊がもつばら衆生教化に盡されたのは、大なる親の聖旨に叶ふべく、我等を佛に成さんが爲である。

然るに今八十年間衣食を要しても、肝心の目的なる靈性を啓發しなければ落第の不幸を見なければならぬ。即ち地獄畜生等の闇黒の中に陥つてしまふのである。それで目的の方から申しますと、宇宙は大な親で、八十年間辨當をくれますのは、人間の親が子供に辨當を持たして先生に知能を啓發して貰つて立派な人になると同じことで、釋迦さまと云ふ大きな先生に就いて啓發して貰つて行けば、永遠に光明の生活を得て人生を完うすることが出来るのでございます。

標準と云ふのは、持つてゐる靈性を開發して行くのであつて、宇宙の親から申しますれば宇宙の目的に従つて行くのである。宇宙の大きな絶大の備を以て吾々を活かして呉れる天地の廣大なる設備がなければ吾々は生きて居られぬと同じことで、宗教から云へば親であります。大きな備を以て活かしてくれるのは親の心に叶ふべきところの佛にする爲であります。それに従つて行けば釋迦同體の佛になることが出来ますのでございます。

光明生活に入る階位

難思光……………喚起位……………心靈の擘曉

無稱光……………開發位……………言語道斷、冷暖自知

超日月光……………體現位……………光明生活、聖意實現

人間が斯く生活してゐる目的に就いては、釋尊の教によりますれば、大なる目的を發見して其の眞理の標準に則り敢て突進しなければならぬ。宇宙の大法から現れたる如來の勢力に引き上げられ、永

遠の光明に進み行くのである。彌陀の本願に歸趣する行程である。宇宙の目的が即ち自己の目的となる。其眞理の目的に隨つて眞善の極なる清淨國に進趣す。即ち極樂又神の國。宇宙の勢力に引き上げられて行くのが攝取せられるのであります。或は彌陀の本願に歸すると云ひ、或は天の父の許へに歸ると云ふ基督の教も同じことであります。何れにしても斯う云ふ眞理でありますけれども之を知らずに居るのが迷の中に居る生活であります。それを知つて従つて行くのが光明の生活であります。永遠の終極に達するのが極樂、天國、成佛とも申します。

それに就いて、光明獲得したる心と、いまだ天然の状態とは如何なる異點あるか、又光明獲得したる心相はいかに變化するやと云はゞ、人の精神は三に分類することが出来る。天然の人の感覺は穢れ汚い。之が清淨光を被つて清淨皎潔に美化する。感情に美化すると、心廣く體肝こころひろくてんかんかに歡喜と妙樂に充さるゝのである。凡夫は迷ひである。其中に悟の光を與へてくれるのが智慧光であります。人間の意志は慾の奴隸であります。どうしても悪いことを覺える。それを信仰の力に救はれて不斷其の力に頼つて善い働きが出来るのが不斷光であります。すると光明生活と云ふのは、それを得ますと始から終りまで毫も變らず、丁度電氣があつて附けますれば十燭其まゝかと云へばさうではありませ

ぬ。

喚起位、開發位、體現位とあります。

本願力

本願力(ほんねんりき)とは先づ本願の意は大ミオヤが一切の子に對する願望である。世間にも親が子に對する望みは子をして親自己と同一の位置に到らしめんとする。而して自己の志を繼がしめ第二の自己たらしめんとするにあり。大ミオヤも亦然り、一切衆生をして成佛せしめて圓滿至善ならしむるにあり。

力とは如來の一大靈力が一切の子等を解脱(げだつ)靈化せしめ圓滿に養ふ力なり。此の力法界に周遍す。此の力太陽が光化熱の三線を以て地上の萬物に及ぼすが如く智慧と慈悲と靈化の三能を以て衆生界の心靈を開悟與樂靈化するの能あり。

如來の一大能力を以て萬物に及ぼすに二面あり。一方には太靈より萬物を發現能生養育する力とな

る。是れ天地萬物に及ぼす能力である。他面には天則秩序の下に一切生物を進化せしめて人類の精神生活となる時は心靈を開發解脱して靈界なる涅槃に攝する靈力あり。

本願力とは自然界の生物を靈界に攝取する力を本願力といふ。

大靈は右の手を以て蒔く種を左の手を以て攝取するなり。天則秩序の中に因果の法則となりて萬物を能生能養するは、其の目的は高等なる靈的生命として永遠に歸趣せしむるを目的とす。此目的が即ち本願力なり。

其の本願を示す爲めに往昔法藏比丘びくと顯れ十劫正覺と現じ、また三世諸佛となりて世に出現す歸する處は太靈の目的なる本願力の出現に外ならず。

衆生の方よりは

如來本願力は常恒に十方に徧在す。然るに衆生如何にして此の靈的光明に攝取せらるべき。是れ衆生心が如來の本願力に契合して攝取同化する也。是ぞ大ミオヤが法藏と示現して本願四十八の中、十

方衆生至心信樂（まよふ）欲生の三心なり。

信——知性

三心の内容

樂（まよふ）——感情

欲——意志

此の三心は如來の大靈力の目的の靈力と契合する心能なり。

至心は形式にして信樂欲は内容動機なり。

至心に深く信ず。（心靈的歸命信順）

如來の外に我心靈を攝取し給ふものなし。（イノチトタマシイトラマカセ奉ル）

如來は生命のミオヤ。心靈のミオヤ。救のミオヤなりと信じ奉る。

至心に深く愛す（心靈的愛樂（まよふ））

如來の外に心靈を愛護養育し給ふもの有ることなし。故にすべてのものに超えて如來の大なる聖寵を愛樂し奉る。

至心に深く欲望す（心靈的欲望）

聖（きよ）きときみ國は眞善美の至極の處、聖き處に於てミオヤの世つぎたらことを欲望し奉る。

光

聖なるこの光明我等が無明をかきさまして眞理をさとらしむ。この光明宇宙秘密の奥室を啓示す。この光生死の中に涅槃を與へ煩惱を轉じて菩提を成（じやうぎ）ず。凡夫をうつして聖者となす。この光われらのなやみの中に慰安を與へ。罪惡を變じて正善とす。この光心靈世界の太陽なり。この光を肉身に満しめて釋迦牟尼と現はれ、キリストと現はる。月球は太陽の光によりて明し。若人この光によりて心靈を曜（あき）かすときは即ち聖者なり。この光を知らざる故に生死闇黒の中にさまよふ。

光明は如來攝化の靈力

如來の光明とは何なる相にて又何なる働をもつておるやを説明せば、光明に色光と心光との二種あ

り。色光とは日光また電光の如くに肉眼にて見るべきもの。心光とは心を照す即ち道理を明かにする光明である。光明と云ふは實は人の信仰に對する如來の方より與へ給へる靈力のことにて、宗教にては如來と衆生との關係を親と子に例し如來の親より衆生と云ふ子に對する作用を恩寵と云ひ、親の恩寵を眞に受ける人の心を信仰と云ふ。故に恩寵と信仰とは親から子に對する聖意と子より親に對する心との双方の間に成立つ作用を云ふ。

華嚴經證疏に喩へば天に日光あり人に眼目ありて能く物を視るべきが如く、たとへば如何に明眼あるも日光なくば見ることを得ず、またいかに照らすとも眼目なき時は見ることを能はざる如く、如來の光明はとこしへに照らし給ふとも、人に信心の眼なくては知見することはできぬ。されば往生論註にも、若し如來の光明は無礎に照らすものなれば何故に世間多くの人が見ることができぬぞとの間に、そは日光は照し居るも盲は見ること能はざる如くに、信心の眼なきが故に如來の光明を知見することはできぬなりと答てある。

今光明と云ふ事は私共の一心に念佛して信心を凝す時にミオヤの方より與へ給はる不可思議の靈力である。また恩寵とも稱へて、實に如來は光明を以て一切衆生を攝化し給ふこと、太陽の光明を以て

世界のすべての生物を活かす作用の如くに、如來の光明は人々の心靈を靈活せしめ給ふ能力である。其光明の存在に就いては實には理窟よりは實行によりて實感し得らるゝのである。故に何人も其光明の眞理を聽きし上には、一心に念佛して實地修行する時、信心萌發する時は、實驗上自己の精神の實感として何とも云はれる氣分となる。

光化の人格これ證明

如來の光明は日光の如くに肉眼で見ることとはできぬ。其存在をいかにして證明できやうとなれば今例を以て示さん。例へば太陽の光熱化に稻の實を成熟すべき力能あるや否やは目には見へぬ。然れども稻實は全く太陽の力(チカラ)の能力に依て成熟することは疑ふべからず。此には田土に種子を播下し水を灌ぐなどして一方には太陽の熱や化合線の力を被むるが故に稻實は成熟する故に、成熟せんとする時期の天候は非常に稻果の成績に影響を及ぼす。是を以て太陽の光に稻果を成熟せしむる力の有ることを證せらるべし。此に例して如來の光明が人の精神を靈化する光明は肉眼では見ること能はざるも

彌陀の光明威神の功德を聞きて其信根を培ひ一心に念佛する處に如來の不可思議の光明は其人の心靈に加はらん。人の本心は佛性の心田地あり。如來光明の眞理を聞薰して、之が其人の信心の種子と成つて、念々佛を念する時は、信心萌發して愈々信根を増長せしめて、信念益々増進する時は信心華開き、花の如き感情及び情操の麗はしき人格は其内容に於ける信念の豊富なる處より現はる。

次に信念の益々堅實になり人格の核たる情操意志が全く靈化して最も道德の鞏固なる人格の神聖侵すべからざる如きに至るは是全く彌陀の光明に靈化せられたる最も信心の成熟したる結果である。例へば稻が始め暖温なる和氣を受けて初めて萌發し次に苗として増長し花開きつゝに實を結ぶ如くに、是彌陀の光明に靈化したる人格を以て彌陀の實在を證明することを得べし。聖善導、聖法然の如き最も圓滿なる靈的人格は全く彌陀の光明に靈化せられたる證なり。實は他の例證を引くに及ばず、人々自から一心に念佛して彌陀の大光明に靈化せらるゝ時は、自己の人格に結びたる核に於て證明せらるべし。

人生の使命

凡そ世にあらゆる物に天分あり。各天の使命を以て世に存在す。蠟燭の使命は人の爲に闇き處を照し人の燈明として其の使命を果す。如何に大きい蠟にても火を點ぜざれば、其の職分を果すことはできぬ。宗教的人類として人を觀る時は、人の精神の奥なる靈性は大ミオヤの使命なる靈的蠟燭である。故に人の心靈にはミオヤの慈悲の光明を點する時、靈的光明燈りつゝ、赫々として威力ある意義ある光明中の生活を爲すことができる本能をもつて居る。

粘土を蠟燭の形にして之に火を點しても燈るものでない。人類以下の動物なる犬や馬に知識の火をつけやうとして如何に教育を施すとも、彼等の土蠟には知識の火は燈らぬ。況んや宗教的靈的の信仰はつくことはできぬ。人類は然らず。宗教の教を以て之等に信念を修養すべく指導し、如來の光明の人の心靈に燃つく時は、其の信念が初めて活潑に活きてくる。蠟にても火が點せぬ間はまだ活きて居らぬ。既に火がつく時は赫々と燃えて活きてくる。人は信念が靈的に赫々として燈るにあらざればミ

オヤの使命を果すことができぬ。人は信念の火がまだつかぬ間は、人生を盲目的動物的に見てをる。自己の歸趣する處那邊に在るや自覺せず。また今現に自己は何の爲めに活つゝあるやを自覺せず。只飽まで食ひ肉に活くれば既に足れりと想へり。心靈空しく損するも敢て惜くおもはず。

靈に燈れば、人生はミオヤの光明の大道を有終の美ある至善の都に達する向上の一路なるを自覺せん。人生の自覺他にあらず、自己心靈の蠟燭に如來の光明の火を點じ靈に燈して人生の行路を取る。自己の信念に燈りつゝある光明、之れ人生の自覺なり。信念の光の外に自覺あるなし。

既に人生の使命とは、自己靈性の蠟燭に光明を點じて自覺の生活之れなりと既に知れり。然らば我等が心は如何に意を用ひて如來の光明發得すべきぞ。心靈に如來の光明の火を點ぜんには他なし、即ち是念佛三昧である。念佛三昧とは人が一心に佛を念する時に、佛の心光人の能念の心に加はり、心々相續、念々、如來を憶念する時に、所念の佛光能念の心に加はる。既に人の心靈に如來の光明念々燃つきたる時を信念發得ほつとくとと云ふ。既に發得する時は蠟燭に火のつきたる如し。念佛の安心即ち心の安置方すまかき最大事なり。甲の蠟火に乙の蠟燭の心先しんまきを接觸するにあらざれば、甲の火が乙の蠟に傳はらず。

念佛三昧が、一心に心を選択して、方を一にし、心を一にひとえに彌陀を念じて餘念を交へず、専ら心々相續して彌陀を念ずる時は、乙の蠟の心ごとが甲の心に接觸するが故に火を傳ふ。七覺支の中に擇法覺支即ち是なり。乙の蠟の心先を甲の蠟火に接觸するが故に火を得ること、能く思ふて知るべし。

されば釋尊は阿彌陀佛眞金色ミツキにして端正ツツ無比なりと想へと示しなされたのは、眞金色圓光徹照して端正無比なるは最も行者の注意をひき易し。こゝに一心に專注すべきなり。また觀經に佛の白毫相びやくぼうがうのみに專注すと云ふも、人の心意は一境に集中するにひき易し。心が統一せず、亂想を以ては三昧ひき起し難し。されば導師は失意聾盲瘖癡人の如くならずば法眼ほふまな開け難しと示されしも、此の一心の蠟の心先を専ら甲の客體の火の一境に注つこめしむる爲である。如來の靈に接觸せざれば自己の心靈の信火傳發し難し。

已に信念の光明喚發するを發得はつとくとす。此光明は蠟燭と火との關係の如し。蠟を離れて燈火はなく火を離れて蠟獨り燈らず。蠟の火なるか將た火の蠟なるか。如來の光明は人の心意を發得せしむ。人の靈は如來の靈火點じて始めて活るにいたるなり。人は天のミオヤの使命の下に人と生れしな

り。我等には之が豫備として本能の奥底に、靈火の點すべき可能性有り。是動物と異なる所なり。されば靈に生きて人生の使命を果し給へ。人生を闇黒の中に葬り去らば永遠の闇黒に墮せんこと必せり。

信 機 信 法

ミオヤより一切の子らを受して恵み給ふを恩籠と云ひ、子らがミオヤの恩籠を仰ぐに全幅をさへげて歸命信賴するを信仰とは云ふけれども、若し信仰を知力と感情と意志との三面に分ける時は、知力的に、ミオヤとの關係を領解し承認し、感情には、親子的の因縁を親密にし、全くミオヤを愛慕する情にて愛と云ひ、意志には、我は子なれば、ミオヤの全き如くに靈格を完成せんと欲望と爲る。今は三分類したる知力的の信仰を信として、初めに、道を求め道に入るには領解承認等の信を要す。

佛法の大海には信を能入とし、信なくば道を求めて、ミオヤの恩籠を我有るがごとくすることが得られぬ。また信は道源功德の母として、道を求めて道を得るは信心が本である。信じて道を得れば、一切の功德も之より生ず。然らば如何に信じ、また何をか信ず。

二種の信。聖善導は二種の信を明す。一に機を信す。二に法を信す。

機を信すとは、自己の機能、己が機能を自覺すること。機は器なり。己は宗教的完全なる資格が生れつき具備して居るやを反省し、現在我の罪惡を自覺する。

曰く、決定して深く信す、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫(くわうきやく)より已來(いらい)常に没し常に流轉(りゅうせん)として出離の緣あること無し、と。

己の機分の如何を信認するに、元來人はミオヤの子にして、また人間の子である。此の兩性の中に靈性は法を得て初めて開發し顯動す。天然としては人間性即ち動物的本能から進みたる人間性なれば唯天然素朴なる本能ばかりでなく、還つて意識的に惡のみ發達して居る。ミオヤより稟(りやう)けたる靈性は永く閉じ籠められて、肉我の動物性が跋扈して主人の如く全心を横領して居る。恰も幼君が狡猾暴惡なる奸臣の爲めに横領されて居る様なものである。靈性は大なるミオヤの靈光に接せざれば顯動すること能はず。暴惡なる臣、肉我は、數多の眷屬を従へ常に我儘勝手を働き、天意のあることを覺知せず、毫も慚恥の色なく、自ら偉がりの顔をして居るも、實は自ら高尚ならざる肉の奴隷たるを覺らむ。

人の罪惡の根本は無明(むみやう)である。人間がミオヤよりの使命を自覺せず、生の眞義を悟らざるのに基因する。人がミオヤの子たる靈性、之れ天の使命にして一身の君たり。一切の動物的の心意は、之に服從して各々職分をつくすべきなりとの、この眞理を未だ覺知せざるを無明と云ふ。

劣等動物より高等に進み、例へば國の建國に先き立ちて劣等種族が群居して野蠻なる國土を作りてありし處へ天孫種が顯はれて前の蠻族を降伏せし如く、天孫種の降臨せざる時は蠻族の酋長が蠻勇を奮つて而も自ら偉なりとする如く、吾人の天孫種なる靈性已に顯動するに至れば、蠻種も竟に開化せられて良臣民と化す如く、之を煩惱即菩提と云ふて居る。

是機法二信を要する所以である。現在我の罪惡を認めて靈我が顯動するに至るには必ず法に依らざるを得ぬ。法とはミオヤが子らを囚獄より救ひ出す契機である。いかに永らく惡魔に囚はれて罪惡に陥入りしにもせよ、本來ミ子なれば親子契合すべき理なくてはならぬ。是ミオヤが子らに對する聖意である。之を本願力と云ふ。

現在我の罪惡を是認するに、

罪惡に種子と現行(げんぎやう)とあり。いかにも吾人は生れながら罪惡である。是れ宗教の必要を感ずる

第一にして、衆生は根本的罪惡の者なのである。若し人は本來正善にして罪惡なかりせば人々は生れ乍ら是れ佛である何ぞ夫れ宗教の要あらん。然るに人は正善の性は伏して之を開發せざれば顯はれず罪惡は改善せざればならぬ性能をもつてゐる。是宗教の要ある所以である。

波 羅 密

宇宙大道法によつて自己の靈能を發展する時は宇宙全體と我とが大調和する。大道と調和し得れば一切人類と内心に調和が得られる。親密に調和し得ざる人は唯肉體形質の意志に由るなり。靈的意志は大靈に合致したる源泉より流れ出づ。

人は其の靈性を具有するも之を發揮すること鑽石より純金を練り出す如く、人の氣質の中より靈性を發揮する。之が爲には碎勵せなければならぬ。即ち尅己精進忍辱等は悉く靈性を發揮し形氣の煩惱感情意志を美化するにあり。性を遂とぐれば必ず調和す。

天體の星雲混沌の状態より宇宙大道法に則り自己の道により一心努力の結果圓滿に其の性を遂げて現在天體は太陽が中心となり、諸の惑星が之に附隨して天地に位し、各自己の性を分ちて守り、其の軌を逸せずして運行し、無限の勢力太陽より常恒に光六合を照し、調和し運轉す。家庭も又然り、其

の性を遂げたる家庭は能く調和し運轉し家庭整ひ相互親み正義其の分を守る。其の性を遂げたる國家は帝王が太陽の如く威神の光仁慈の熱能く國民を撫育教化し上下調和す。

一切の終局は大調和に歸せしむ。之を爲すには同體大悲おんたいだいしを以て相愛親し、正義以て自ら守り義務を重んじて、自己の靈性を發揮し、六波羅密はつぱらみつを以てす。

波羅密とは到彼岸、宇宙終局の圓滿なる大道の即ち神國に到るにあり。宇宙大道法は一切の衆生をして無上佛果に到らしむるにあり。之に到るの道を大菩提となす。其の大道を實行し向上進趣するの過程を波羅密と云ふ。即ち心靈界の大帝都に達する道中である。其道の行程を波羅密と云ふ。六度、十波羅密等あり。又廣くは無量の波羅密あり。總べて其の道業だうごふに於て、完全に成熟したるに名づく。般若はんにやの實智じつち若くは權智ごんち、又忍辱にんじやく精進しやうじん克己こくぎの如く、何れの道業だうごふに於ても、至誠熱誠碎勵精修する時は必ず其の性を遂ぐ。喩へば礪石より精金を練出する如し。要する處、自己の性を盡し、本能より總ての智徳圓滿なる靈格に到達すべき伏能は具有して居る。然れども之が性をとげる迄精練せねばならぬ。靈性は大靈の分なれば靈性が指導する處の行爲は必ず宇宙大道と合せば即ち是れ無上菩提である。

遠大なる望

理想のぼさつとして生活するもの、遠大なる望なしに日をくらすべからず。望なしにある者は已に心霊死したるものなり。いかなる望かこれなる。聖國の世つぎたらんことなり。聖國の世つぎとならんにはその資格を備へざる可からず。資格とは何ぞや。聖旨の如くにきよからしむるなり。ミオヤにあらせ給ふ聖徳を與へらるるために望をおこすなり。すべての眞理をさとらんとす。心霊をみがくなり。四面玲瓏とかゞやくように心情を如來と融合するなり。またこの神聖なるみむねをあらわすようにはたらくなり。正義のみむねをあらわすようにはたらくなり。世つぎといふことを忘れざるなり。無上の欲望をもつて進み、小成に安んぜざるなり。一日もむだには日をくらすざるなり。一寸の光陰を千金よりおしむなり。むだ話をして時間を費すことをせぬなり。欲望なき人は貴重なる時間を浪費するなり又一日は極樂の百歳なることを思はざるなり。欲望なき人は如來が常に與へつゝある無價の寶珠をうけざるなり。この欲望はいけるくわんぜ音なり、しやかむになり。

人格の三位

人格を三位に別る事を得。一、非人格、二、人格、三、靈格とす。亦此三格を人類中の三類聚とも云ふ。一、邪定聚(じやていしゆ)二、不定聚(ふていしゆ)三、正定聚(せうていしゆ)。

一、非人格、また邪定聚とは、人類中の劣等なると邪惡の類である。之に三種あり。畜生と餓鬼と地獄の性格を非人格とす。畜生人格は人類中に生を受けても人生向上の行路なるを自覺せず。されども餓鬼格の如くに肉欲我欲の病的にも陥らず。地獄格の如くに邪見逆惡の方にも墮ちず。他動物の本能に近く動物的に生活したる者。餓鬼は本能的に盲從せず肉慾の病的に墮し、色にすさみ、酒に耽り、美を嗜み、美服に憧がれ、爲に他物をぬすみ、又は詐僞して遂に五欲の爲に墮落したる者。又名譽、權利、財産等の欲望が昂進して、我欲の病的に陥入りたるものが餓鬼格にて、地獄格は邪見逆惡の方のみ發達し、天に逆ひ人に戻り、逆惡無道の性格。斯らの三種は惡の三等に墮すれども皆人格備はらざる類聚なる故に非人格と云ふ。

二、人格。人類中全く人格具備したる中にも亦三位あり。内徳缺少して外貌に装ふ善及び徳行を好み、又傲慢勝他の動機より善を爲すものは修羅格と云ふ。次に、人道的人格より道徳に契ふ人は全くの人格なり。常識に富み人格具はり人類の標準と爲るべき人物を人中の人と云ふ。人中の天とは公明正大博愛の君子志士仁人、まことに稀に見る高等なる人格、世の爲め人の爲に徳を施し功を與ふ。これを天的人格と云ふ。

これらの三種は勝劣同じからざれども、人格具備の類聚とす。然れども人格としては完全なるも、進んで靈性的生活に入ることなき爲め、非人格に比格せば實に立派なれども、靈格より見れば精神生活の上に於て永遠の光明を認めず劣聚なる事は免れぬ。若し靈的光明を得るに至らば進んで靈格に入る事を得。若し惡縁に依れば非人格に墮落するの憂なき能はず。故に不定聚の類とす。

三、靈格。此に三種あり。一、聲聞(しやうもん)、二、緣覺(えんかく)、三、菩薩佛陀。

靈格の中に三位あるも、通じて靈格たることは個人我を超越して宇宙大靈と合一し靈的生活に入りたることにおいて一致す。故に靈格とす。通じて大靈と合一するは同一なれども、大靈中の自己の靈が唯「體」のみ合一して無量の「相(さう)」功德と及び「用(よう)」不思議の働きの上に於て三人相同じか

らず、故に三位となす。

聲聞(しやうもん)は眞空無我を證し、小我を超えて大自然と合一し、神通自在と無漏の聖智とを以て眞空眞如を證得す。然れども己れ獨り涅槃に在りて他の一切を自己の如くに度すことにつとめず。緣覺(えんかく)も小我を超えて眞空涅槃に入つて生死を離れたるも、斯二聖は自己のみを度して他の一切を度すことにつとめず。聲聞は他の教示に基づき自ら得道し、緣覺は無師自然に悟達したる聖者である。菩薩と佛陀とは同一の因と果との別である。

佛敎に大小二乘ありて、小乘敎には、衆生の五戒を持ちもち人道を行ふ因には必ず未來に人間界に生を受く。勝妙なる理想を以て十善を完ふしたるものは天上樂界に身を受く。四聖諦を以て眞空眞如を證し生死を解脫し涅槃(ねはん)を永生に歸着することを得るは聲聞乘である。小乘敎には道德上正しき行爲又人格としては實に完全無缺なるものも、四聖諦八正道を以て小我を滅し無爲眞如の涅槃を得るにあらざれば生死を解脫(げだつ)することは出來ぬ。故に終局の目的とする處は生死の苦を脱し涅槃永生に歸趣するにあり。かの涅槃は一切の繫縛(けいばく)を離れたる無爲寂靜(じやくじやう)の處である。其妙境の消息は凡夫妄想分別の心を以て測る事は出來ぬ。聖者自ら證入して實驗する處なり。

大乘佛教の終局目的も六道生死を離れ永恒常樂の涅槃界に歸着する處にあり。大乘教中にも權實(びやく)三乘一乘等に階級があるけれども、通じて云はゞ無上正覺(しやうかく)を成(じやうじ)じ永恒常住の大涅槃を得るにあり。正覺とは衆生の心の無明(むみやう)の眠に生死の夢を見つゝあるを朗然として無明の睡より覺め、本覺の光明が圓かに照して一切の眞理として照見せざるなきを云ふ。涅槃とは相待有無生死を超えて絶對なる宇宙大靈體と合一し永恒常住の靈界に安住するを云ふ。

教祖釋尊が六年勤苦の後、摩訶陀(まかだ)の正覺道場菩提樹下に於て臘月(りやく)八日の曉朗然として正覺を成じ、涅槃常樂を發悟なされた。從來の生死の夢さめし妙境界は正覺の旭東天に昇りて普く天地に照耀するが如き心靈の状態である。

釋尊が正覺の上に常樂界に證入して實驗せる靈相を説示したるが即ち華嚴經(けん)である。釋尊の本體は舍那(じやな)圓滿の如來身、相好光明普く法界を照して遺(い)すことなく、住處を蓮華藏(れんげ)世界と云ひ、全宇宙を盡して微塵ばかりも清淨莊嚴不可思議の境界にあらざる處なし。無量無數の法身菩薩の爲に微妙の法を説いて化益(けやく)を施し給ふ。かくのごときの靈妙境界は永遠に滅する事なく常住に法身の菩薩を教化して止むことなし。

佛陀と菩薩とは、因と果との位にして、大菩提心を發して上菩提を求め下衆生を化せしめるの願を發し、智徳圓滿を期す。一切を度して同一の妙果を得しめんとするの願を發し、これが實現の爲めに最善の努力をし、志勇猛精進にして忍辱にんじやく、精進しやうじん、禪慮、智慧、等の萬善萬行を以て終局に達せんとす。

菩薩が初發心しゆはつしんより終局の佛果圓滿に到達する階級に五位あり。十信、十住、十行じゆじやう、十回向、十地とす。十地の願と行とを成じやうじやくじて究竟圓滿に體達したるを妙覺即ち正覺を成じたる佛陀である。菩薩が初めより佛果に至る階級を月の盈缺えいけつに喩ふれば、凡夫が人生に永遠の光明を毫も認めぬ人は晦月くわいげつのようにて、初めて如來の靈光に感觸し一分自覺を得たるは新月にして、漸々に月が増進してついに圓滿なる滿月となるは即ち菩薩の滿位に達し、智徳圓滿なる佛位に到りし姿である。菩薩は即ち佛子である。亦法王子とも云ふ。やがて佛と成るべき階級である。

大乘佛敎の教ふる處によれば、十法界の中に於て三惡道と三善道との六道法界は靈性未だ開けず。宇宙の大法に順するを知らず。生死に流轉りうてんして止むことなし。故に迷妄の凡夫と云ふ。聲聞と緣覺とは生死を脱すれども、未だ圓滿なる終局永遠生命大自由の位に到らず。故に十界の中唯菩薩のみ

大法に則り、靈性開發して光明の生活に入り、現在を通じて永遠の生命に入り、自ら人生の眞理を自覺し、而して亦他人にも覺せしめ、自覺して光明の生活に入るが故に其行爲も又向上的に佛果圓滿を期してこれに向つて進趣す。

經に「一切衆生本法身より生じて法身に還らざるなし」と。

人生の終局目的

大乘佛教に教ふる處の人生の終局目的は正覺を成じ涅槃を得るにあり。

正覺とは自己の靈性を開きて眞實に自己を覺了したること、即ち心の闇はれて本覺ほんがくの法輪が現れ出づること、心靈の日光で普く萬法を照して誤るなし。又他の凡てに自性じしやうを開かしめ眞理に契くわいふ生活を遂げしめ自他共に光明的行爲を以て向上せしむ。

涅槃とは凡夫の生死を超えて永遠の生命に入りたること。故に釋尊の聖徒らが釋尊の指導により修行卒業の時は有餘涅槃あまのむらに入る。有餘涅槃の有餘依は此精神が依止する形態を云ふ。たとへ身體

は此まゝなれども心靈は生死を離れて絶対永恒の大靈と合一し永遠不滅の生命となり常住安樂の状態と爲る。然れども肉體のあらん限りは精神は無爲安穩(あんゑん)の極樂にありながらも、肉體は生活のつとめ又寒熱飢餓の苦は免れず。其れを有餘涅槃(あまのむく)と云ふ。言ひ換ふれば肉體の儘ながら神(かみ)は極樂に安住するの謂(い)である。

いよ／＼肉體の生命劣等な肉體の殼(か)を脱して心靈が極樂の本に歸し常住と安樂と自由と清淨との法樂の身となる。之を無餘涅槃(むじゆねはん)と爲す。

正覺涅槃

正覺涅槃とは自己を本としての悟道的哲學的の語で、宗教的に云はば無量光無量壽の中に救濟せられたることである。

正覺と云ふは人の靈性開發して廓然と大悟の目醒(めざめ)である。目醒めて見れば大日光は六合を照して萬境現前す。靈性目醒めて見れば本覺の無量光の日光は心靈法界を照して一切の眞理は了々と現前

す。譬へば日光と人の眼目との關係に依て天地を明に見るなれども、自己の眼目の方を本として正覺となすは聖道家である。太陽の光明を本として光明獲得と云ふは宗教家である。又自己が小生命の生死を脱して永恒の大生命に入るを涅槃と爲るが聖道家で、生死の凡夫が如來無量壽國に歸入して佛と共に無量壽と爲ると云ふは宗教的である。

此の如く大乘佛敎の宗教的方面、人生の歸着する處は、吾人が現在の自己は無明の闇に人生の歸着も自覺するを得られぬ凡夫である。依つて例へば太陽なくば世を見ること能はざる如く、吾人は心靈界の太陽無量光如來の光明を仰ぐにあらざれば眞理にかなふ生活は出來ぬ凡夫である。依つて一に靈的日光の明ることを求む即ち信仰である。

信仰に依つて光明獲得(獲得)し光明生活に入る。從來の生死の凡夫も全く如來無量の光に歸する時は一滴の水も大海に入て一味に歸する如く、我が此生命が此まゝ永恒常住の無量壽と歸一したのである。

無量光の中に入るを我らの光明と云ひ、無量壽と歸一したる生命が即ち生活である。之を光明生活と爲す。然らば即ち吾人の心光は無量光中の一分に、吾らの生命は無量壽と合一す。此無限の源より

此身に靈徳を實現的に行爲するが即ち人生の歸趣である。

これまでは通じて大乘教に由つて一應の理を説話したり。是より光明生活に入る實地宗教的方面を話せんと欲す。

光明生活に入る心

大乘佛教の人生を指導する趣旨は正覺と涅槃を得しむるにあり。

之を宗教的に云はゞ靈的光明を獲得し永遠の生命を信じて光明中の生活に入るにあり。此の太靈の光明中に歸入すれば永遠不滅の生命となる。

この心靈界の太陽を無量光と云ひ其安住する處を無量壽國となす。故に宗教生活に入るには先づ心靈界の太陽なる如來の光明の實在と實力とを信ぜざるべからず。無量光如來は精神界の太陽である。

太陽のエネルギーに光熱化の三線ある如く、如來の光明に三能あり。智慧と慈悲と靈化との三徳あり。智慧は心を照す光線である。太陽の光線にて世界のものが明に見ゆるが如く智慧は心の世界の眞

理が見ゆる。慈悲は太陽の熱線にて萬物を温る如く如來の慈悲は人の感情を暖めて苦を抜き樂を與へて有難き樂しき生活として下さる。靈化は太陽の化學線が地球の生物を活かす如くに、如來は人の意志を靈化して善良なる人として聖意に叶ふ働きをなさして下さる。

如來が十方の心靈を照して攝取同化し給ふ靈力を如來本願力（まこと）と云ふ。本願力とは一切衆生の子等を御親の恩寵の光を以て闇と惱と惡との心を悟と樂と善とに同化し、如來なる親の子となさる聖意を云ふ。

經に彼佛光明無量、照十方國、無所障礙、是故號爲阿彌陀。又た彼佛光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨。また是故無量壽佛號爲無量光佛、乃至超日月光佛。其有衆生、遇斯光者、三垢消滅、身意柔軟、歡喜踊躍、善心生焉。

如來の大靈光は常恒不斷に照して衆生の上に及ぼし給ふ事を信ず。此如來の光明と合一融合靈化する人の心意を三心とす。三心にして始めて如來の心光と合す。

經に十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺。

此の金文は如來が迷没の衆生を濟度せんが爲に法藏比丘（あま）と身を現じ、四十八願を立て、無明罪

る。如來慈悲の相好まうごは慈悲心の現れである。其相好が即ち大慈悲心である。我等が如來を深く愛慕する心に現はれたる溫容が即ち子を愛する慈父である。我等がまた眞實に如來を愛する眞情あれば必ず慈悲の面影を憶念せざるを得ない。眞實に愛して玉顔を憶念する時は面影を見ざるを得ぬ。眞實に如來を愛する吾心を、客體に表現したのであるが、如來我心となりて、我如來を（二字不明）かは解らぬ。

如來の慈愛に觸るゝ時は充され自己が即ち愛化し而して自己の圓滿なる調和を得。總ての賤劣なる物を愛せず如來を愛慕し融合美化したる情を以て見れば、すべて人に對して相互の間が融和す。

如來は大慈悲心者である。經に佛心者大慈悲是也と。如來の生命は大慈愛である。例へば太陽は地上の萬物に對して愛を注いで居る太陽の愛に依つてすべては活ける如く、衆生の心靈的生命が活きる。

我等の心靈は大なる慈愛に生きる。愛とは我らは如來大慈愛に依て活くる故に我等靈の生命も即ち愛である。若し人愛なくば生命なきなり。太陽の熱の如く如來は暖溫なる慈悲を以て一切心靈を溫暖なる靈生命として活かす。我等が肉體の生活する間は體溫あるが如く、我らの靈の生命に愛てふ靈的

溫度備はれり。タゴール曰く、本來人間は自分の奴隷でもなく亦宇宙の奴隷でもない。人間は唯愛に生きて居る。人間の自由完全は愛其ものの中にあると。又人間生活の目的を遂げる人々とは、人と自然との融合を得て、神と共に合一し、そこに安心立命を得ることの出来る人々を云ふのである。天國は我物でない、我を離れたる衆生共有の調和なる心靈世界。

我如來を愛す。如來は何處に在すかと云うに、如來在さざる處なく如來は絶対無限である。我々は如來の愛子である。吾らの靈性は如來の中に投歸没入して、亡きとして仕舞ふのではない。我ら個人の靈性を通じて如來を見る時絶対無限の如來を知見することが出来る。絶対なる如來は一個の靈性の中に溶け入らんとしてをる。

如來を愛するものには無限の如來我にあり。如來我に〇れて來るが故に、我心は如來と融合す。如來の慈愛は最温かに最安らかなるが故に、如來と融合した吾心は實に安らかにして且つ樂し。即ち法悦に充滿せらる。吾人の喜は吾人が心中に存する如來の賜物である。

法報應の本地

如來を三身各別に説くは方便教である。三身即一を説くは眞實教である。しかれば如來は絶對にして空間時間を超絶し永恒の存在なり。本有(ほんゆ)常住の無量壽佛なり。十方三世一切の法報應變化身(はんにん)の本地なり。其本有(ほんゆ)の彌陀が本來絶對の大靈界にましましてあれども、相對生死の方面の衆生に對して、三身を現(あらわ)す。天則秩序を統一し擔保する原則としては法身(はうしん)と名づけ、また如來自性(じしやう)の靈界に攝取せんが爲には報身の大光明者と現じ、衆生を教化の爲には應身(おうしん)と現はれ、大經に錠光佛乃至五十三佛も、世自在と同じく、法身常住無量壽佛の分身應現にして、また法藏因位十劫果成(じゆんぎ)も同じく常住壽佛の慈悲應現、大ミオヤがすべての子等の攝取救度の方便ならざるはなし。また法華壽量品(じゆりやうひん)の如來は本因無量壽にして、燃燈佛乃至三世一切の諸佛は即ち如來の示現なりと。西方の彌陀しやばの釋迦悉く本有常住無量壽の示現にあらざるなし。宇宙の本體に永恒存在あり。彌陀即ち其本體である。眞實如來である。今も現に此處に存在し給ふ。永劫常然として

在し給ふ。永遠のロゴス何時か盡る期あらん。

永恒常住の靈界

極樂は無爲泥洹(ないをん)の都、經には國泥洹(ないをん)の如しと説き、導師は極樂は涅槃界と呼ぶ。涅槃は常然の靈界無始無終の一切諸佛の安住する處。釋尊無上正覺の曉に證得し給ふ處を大涅槃界と名づく。釋尊は爾來常に神(かみ)は涅槃界に安住し、さればすべてに勸めて常住の涅槃を示し給ふ。釋尊及び聖者の證入する涅槃界は常樂我淨四德莊嚴(しやくごん)の境、眞善美の極まれる處。佛教多門なれども歸する處。涅槃に入ることのみ教ふ。彼靈界は清淨無比の莊嚴五妙境界の故に淨土と名づけ美天國とも曰ふ。如來大法樂の快樂安穩の故に極樂または妙樂界といふ。また無量光明土とも、無量壽國とも、常寂光土(じやうじやくくわう)ともまた蓮華藏界(れんげざい)、また密嚴淨土(みつごん)と云ふ。名は異にして其の體は一なり。

涅槃界絕對にして一切處として然らざるなし。何ぞ方所あらん。衆生は絕對なる涅槃界に在りなが

ら、自ら生死の中に出没す。こゝに於て容易く涅槃常住の都に入るべき道を教へ給ふ。之を念佛三昧門と名づく。

三昧無爲即涅槃

是導師の讚文。善導大師此の眞理を自證し給ふ。此身このまゝ涅槃常樂を感じらるゝは即念佛三昧さんまじなり。念佛三昧には、一心にミダを念じて我を離るとき我即ち彌陀なり。宇宙は本來大ミダ佛なれども、衆生自から此雜然たる自然を驗さる。一心に念佛して自己の心ミダに同化するときは、一切處としてミダならざるはなし。彌陀在す處即ち大涅槃界なり。念佛三昧ミダと同體にして即ち三昧の常樂を感ず。この心境を不可思議の三昧涅槃と名づく。

念佛三昧を得れば心常到大涅槃に安住するなり。

理想に於て極樂に逍遙するなり。極樂とは即ち彌陀の在ます處なり。彌陀身心遍法界何の處にか彌陀在ますやらん。たゞ衆生自ら迷妄に没して見ること能はざるのみ。若し一心念佛してミダと心が相

應する時は、此處に在て極樂を發見すべし。

若し此身心を離れて極樂を求めんとせば得べき理あることなし。たゞすべからく一心念佛して此心の中に於て絶對なる大ミオヤに冥合すべし、極樂に證入すべし。

三身一如の釋尊教化の目的

法身ほうしんとは天則秩序を統一する實體のこと、天則とは自然の理法のこと、たとへば火の熱、水の潤ひ、風の動、地の堅きは天則である。また眼が見る、耳が聞く、鼻が嗅ぐ、舌が味ふ、身の觸覺に於ても天則である。天則とは人の約束から成り立つた法でなく、自然の理法である。柳の緑、花の紅、鶯の白き、鳥の黒きも、人の身體形成も精神形成に於ても天則、また生物が飲食にて榮養し、雌雄の交合より生殖するも天則である。萬物各天則を離れたるものなし。秩序とは萬物が天則に産出し成長するに秩序あり。地球は太陽に分婉せられ熱が冷却し外皮が次第に層り、現地球と成りて萬物を發生するに至りしも秩序的に發達したる、植物にも幹の精髓が果核を結び種となり、次に外包を出て

次の幹となり葉と成り次第に秩序的に、動物にも親の精髓が母胎で外包をつくりて子の身體と成り其子と成りて秩序あり。天則秩序をはなれて生産し活動すべきものなし。天則秩序を統一し擔保する理性を法身とす。

ミオヤは法身の權能である。然らば法身自體は何から産出せしやと云はゞ、始もなく終もなく法身自ら存在する。一切處に徧滿せる永恒自存の心靈態である。目に見えねども實存することは、人の精神は無形にして存在するが如くである。

全智、天則の理性が萬物を産出するに其秩序の正しきを見よ。

人の精神錯亂する時は、文章にしてもまた書畫を作るにも、秩序なく體裁も整はず完全なるものを形成すること能はず。然るに天則が天體を造化するに、地球の萬物に、いかに植物學者がひそかに植物の構造及形成の理を知るもいかに工に妙を得たるものも造ること能はざる植物を自然的に造り、人の身體組織が解剖上より見るも實に妙を極めたるに驚かざるを得ず。また生理學上より見て實に精神榮養生殖の作用の如きより全體よく整へること唯造化の自然知の妙を稱する外なかるべし。これには人類の如きの意識的知力にあらざるも、天則理性の知の理性なかるべからず。

全能、いたらぬ處なしとは、宇宙間萬物産出し活動するもの一としてこの能力を離れて有ることなし。例へば地球萬物の如きの活動は太陽のエネルギーに歸す。若し太陽の力によらざれば、地球は枯渴して一の生物有機物もなきに至らんと。太陽の力と雖も其源ふともとなかるべからず。其供養によらざれば太陽ひとり能力を與ふべきなし。故に一切萬物の活動は法身の徧動を離れてあるなし。故に知る一切萬物は全知全能によりて産出し之に擔保せられざるものなし。

報身。所在は至眞、至善、至美、眞理の靈界とも、清淨國土とも常寂光土とも名づくべき、一切の麁惡無明等の脱したる心靈界にまします。人の心理的に云はゞ無明麁素質の離脱せし精神が觀する心靈的宇宙なり。吾人の最高等なる宗教意識の欲望の對象なる神靈的理想の觀念界いまだ理想にして實現せざる神の國なり。此至善至美のきはみなる方面にまします。自然に塵數の相好光明ありて光顏威神無極毘盧遮那萬德圓滿したまふ。其處は自然に種々の至美の莊嚴美を極め妙を盡す。金銀瑠璃寶石の高樓閣は九蒼に聳へ、寶樹寶林七寶の光色煌々として日月双びかけ、八池水金波をかがやかし五官の妙樂自然にして心像なり。

如來四智の光明は普く十方を照して一切衆生の心靈を開展し、此光明は周徧するも心靈に對する光

明にして觀念的に觀することをうべきのみ。一切の處至心に觀念する時は、心靈此の光明によりて開發し一切の處如來四智の中ならざる處なきを意識す。

神聖正義とは心靈開展したる心靈には如來の神靈態光明法界に充ちて、これに對する觀念には、自己の心靈に反照し、神聖にして侵すべからざる觀あり。故に自律的に自己心靈に無上權威あり。正義の勢力に對する觀念は自己の私を棄て如來の正義に協力して義務的に活動せんとす。

恩籠の御名と如來無限の慈悲は法界に周徧して、此の觀念には自づと自己が罪惡の闇黒も旭日に照さるゝ如く、めぐみの觀念に無明の闇はれ、感情が苦惱と罪過との中より脱却して靈福を感じ平和安穩となり、靈の意志としては聖意の實現として道德的行動するに至る。

法身般若解脫(法身般若)の三徳、眞理と智慧と慈悲との光によりて正知見を開き、解脫の徳により苦惱罪惡より解脫し、靈化して如來の理想の淨土に生活して、この依身を脱すれば實在的に寂光淨土が實現して、宇宙として如來の至美界ならざるなきを知るべし。

應身。教祖釋迦尊は其本地は三身一體の如來。

三身とは法身報身應身、法身とは天地萬物の本體、一切は之より生じまた之によりて保存せらる。報身はいと聖き美しき靈界に在していと麗しき相好と、智慧と慈悲との光を以てあらゆる世界の人類を攝取する如來。

應身は人格の身を以て世界に出で人類を救濟する如來。釋尊は應身である。

報身とは法身の粹にて常樂世界に在して自在の徳をもて慈悲心より應化身(おんげんしん)を示現して人類を救濟す。

西藏(チベット)の佛典にアマタ佛は聖き國に在して人佛シヤカの本地なり。アマタ佛大悲三昧より人佛シヤカを化現して人類を救濟すと。

八相應化(おちげ)は、人界に出たる化身(しん)の生涯の歴史であります。八相とは、生天(じやうてん)、下天(げてん)、托胎、出家、降魔、成道(じやうだう)、轉法輪、入涅槃を云ふ。

生天。釋尊が人界に出づるに先だちて天上のトシタの内院に在て天上と人界とを利生し救度し給ふ。この時を善慧ボサツとは名づけられたり。

下天。天に在して下生すべき時と處を鑑み給ひ、智仁兼備りたる父母と文化已に開けたる國とをえ

らみて、カピラエ城の淨飯^{じやうぼん}大王を父とし、マカマヤ夫人を母として四月八日に夫人體浴清潔にしたる清夜に於て、夢に空中に白象に乗り光明熾なる聖者が天女の爲に圍繞せられ、伎樂花香の靈感を得たる時に神を母胎に降し給へり。

降生。夫人ラビニ園に遊入し四月八日無憂樹の花いと麗しきを舉げて之を摘んとする時、菩薩は右脇より生じ給ひ、現に七歩あゆみ給ひて正立して自ら聲を舉げて天上天下唯我獨尊と稱へて即ち妙なる光明を放ち給へり。

太子生れ給ひし日、五百の寶自ら現はるなどのよろづの善事集るを以て、シタルタ太子と名づけられたり。譯すれば最勝にして一切の事業遂ぐと言ふ美しき名なり。

香山に阿私陀^{あしだ}と言ふ仙人あり。神通を具へり。太子誕生の瑞光を感じて、遙かに來りて太子の三十二相を具はるを見奉りて嘆じて曰く。太子の相好は必ず上なき道を成じて人類を救度すべき道有し給へども、我齡已に老いたり太子の教化に遇ふことを得ざるを悲しむと。

太子幼にして學堂に在つて五明四吠陀^{ごめいしよはいだ}等の最とも高等なる學術を修め、また禮樂射御書數など一切を學ぶに道として成ぜざるなし。

太子は輪王として四海を統御し萬乗の君たるべき御身にて、天下の榮を一人に聚むべき界報いみじくましますなれども、四門の遊びに老人病人死人の相を見て、世間の無常をさとり、また異時に於て道人の靜肅にして身心調熟し威儀の齊整たるを見て、益々感發して世の道の外に心靈解脱の大道あることをさとり、道心彌切に發し給ひぬ。

太子は曾つて執杖釋氏の女ヤソタラといふ賢婦を娶り給ひ、いとむつまじき闍門の中に於て王子ラゴラを擧げしかども、大道心いと切にして殊に印度の民族的宗教及び道德より、發展して人類的宗教と道德を以て一切の人類を一慈の下に攝せんとの大道心よりつひに個人的幸福は勿論個人的道德を犠牲にして、大志を起し、ために國と位とをも顧みるいとまなきにいたる。

太子一日父の王に白し上るには、それ世間は生ける者は必ず死し會者あひまひ定んで離れざるを得ない。實に世はまことに怙むべきものなし。願くば我に出家を許させ給へ、我道成就せば、人類のため不死の門を開きて一切を救度せんと欲す、是我が願なりと。父王之を聞き涙に咽んで言ふ能はず。太子は少惠の爲に一切の人類を救度すべき大志を止め難くして、年十九歳四月七日の夜馭者車匿しやくくを具しケンチヨクてふ駿馬に駕してひそかに王城を忍び出でたまへり。

太子は城門を出で曉がたにバギヤ仙苦行林に着して、馬より下りて玉體を飾る處の寶冠瓔珞などを解いて之をシャノクに托して姨母とヤソタラに遺贈し給ひ、また珍妙の衣をば脱ぎて自ら髪をそり除きて而してケサを着し給ひぬ。然してより山林をめぐり諸の道士につきて道を求む。アララヤウトラなどに法要を問ひしに、彼らが説く處未だ終局の眞理にあらずして辭して去り、自ら精修して發悟する外に途なしとて、ニレンゼン河の東岸なるガジヤ仙苦行林に逝く。此地の樹林いとうるはしく水清く萋々たる草は緑の莖を布たる如くなるを愛して此處に在つてもろもろの苦行を修め、日に一麻一米を糧とし無上正眞の道を得んとす。修すること六年の春秋をむかへ身體疲れ甚しく皮骨連立せり、一日ニレンゼン河の清流にいりて洗浴したるに氣力衰へて自ら出ること能はざれば、樹の枝によじてやうやくに上れりと。偶々そのほとりなる牧の長の女ナングバラが獻ぐる處の乳糜によりて氣力回復し、元の如くになりぬ。夫より南の方ガヤに到り、ヒバラ樹の下なる金剛座に於て、吉祥が施せる柔輦草を敷て跏趺坐し給ひ、時に大誓願を發して謂へらく、我今正眞の道を證せずば、寧ろ此身を碎くとも終に此坐を去らずと。宇宙を全動せしむる意志の力はつひに天魔を驚動せしめ、ために魔王が衆多の眷屬を率ゐて逼りこころむるも、時に大地震ひ轟き毒箭の風に刀劍の雨をふらし力をつくすも、大ボ

サツの金剛の意志をば毫も動かすこと能はざりき。つひに之を制伏するに智力を以てしまた魔をして再び起つ能はざるに至らしめぬ。

臘月じふ七日の夜に於て天魔を降伏して金剛定に入り、初めに天眼を得て空間を盡して現はれ、ついで宿命通は時間的に過去未來を通じて知り、後明星ほのかに出づる時に正しく無上正覺を成し、無明の夢さめて宇宙の眞理として證得せざるはなきに至る。

已に正覺を成じ已つてより、初めに華嚴三昧海中の高談には法身の大ボサツ等を利し、つぎに鹿野苑ろくやに於て五比丘ごしきを度し、大悟の曉よりネハンの夕に至るまで五十年間の教化は諸國をめぐり、無數百千の弟子を度し、所謂る比丘比丘尼信士信女其かず量りなし。

佛陀の生涯の言行は一の缺點なく、完全圓滿なる道德は實に悉く一として模範ならざるなし。五十年間いかなる境遇にも意志を變じ給はず、健闘に於て全勝の凱旋をなしたる、八十にし深禪定じんぜんじやうに入つてクシナのバツダイ河の邊なるシヤラ双樹の間に於て二月十五日夜諸の弟子らの爲に遺誡したまひ、有餘依うじゆいの身を棄てて大涅槃界に歸したまふ。

佛陀が自ら本地眞實を示し給ふ法華壽量品に、意に曰く、我人中に生じガヤに於て初めて正覺を成

じつひに涅槃に入るとは衆生が感見するかりの依身にて、我眞實の法身は無量壽にして久遠より如來なり久遠永劫に滅することなし。たゞ衆生の爲に方便して教化の爲に出沒するのみ。衆生が肉眼に感ずる世界は時たらば滅すべきも、我眞實常寂光土(じつじつじつじつ)は常住安穩にして天人常に充滿せり。園林諸の堂閣種々の寶を以て莊嚴す。我は無量光無量壽如來なれば常住に此に住して衆生を度すと。言を換へて云はゞ我が眞身はアミダ如來にして永恒淨土に安住するなれども、衆生は無明に隠れて之を見ることが能はぬのである。

宇宙は人間の感見に現象界轉變無常にして生滅變易なれども、如來の佛眼で見れば宇宙全體が本來常寂光土即ち極樂淨土にて眞善美の靈界である。

然らば衆生は宇宙精神なる如來法身より出でまた如來の聖き靈界に歸することを得るとせば、いかなる方法を以て之を得べき。答て曰く、其方法の中に於てシヤカ本懐としたる法華により、一心に佛を見んと欲して、三身一如なるシヤカの本體即ちアミダの聖名によりて聖旨の現はれを念じて止まざる時は、三昧定中に於て其法身三十二なるを現して、この靈感の知見により心靈更生して有餘(うじゆう)の身は變らざるも心は寂光土にすみ遊ぶ。

已に更生したる心靈は清く深く無限の泉源より靈福を感じ、有餘の依身を脱する後は無爲(むゐ)の都にして、一面は常樂我淨極みなく一方には化身(むし)とを出して世界人類をすくふことをう。

涅槃の大道をさとり給へば一切の衆生を引導して大道に歸入することを教へ給ふ。ネハンとは即ち寂光土また極樂淨土なり。故に釋尊教化の目的は一切を攝取して極樂涅槃に生ぜしむるにあり。

有餘 無餘 無住所 涅槃

佛教の宗教的精神生活即ち信仰の行程としては、人の精神生活に於て人が生れたるまゝの精神には自然に佛性と煩惱(本心と氣質)との二性ありて具有す。此精神が一は開發すべきもので二は靈化すべきものである。人は如何に天資聰明なるも其資質いかに豊富なるも質のまゝにては宗教心は活動的ならず。人の精神には必らず解脫し靈化せねばならぬ垢質が具有しておる之を佛教には通じて煩惱と云ふ。此煩惱なる悪質は自然に脱却すべきものにあらずして必ず之を脱却すべき契機を要すこれ宗教の必要な所以である。若し人が宗教なくとも自然に解脫し靈化すべきものならんか宗教要なきにい

たる。若しまた宗教の教化を被むりても解脱し靈化すべき性能なきものなれば宗教なきに至る。

佛教、釋尊の宗教目的は那邊に在かと云はゞ人は本來質のまゝでは本心の靈性も發揮せず煩惱の惡質も脱却せず此のまゝではいかぬ。釋尊は自ら太子の時代に宮中に在て人生問題に煩悶しまた自己の胸中には無明なる不靈福なる垢質具有するが爲に精神生活が靈明でなかつた。然して後に入山學道の後に無上正覺を證得なされた當時從來の無明罪惡の人間の心が滅殺して靈なる光明を獲正覺を成じて生死の凡夫が永生の靈と生れ更りなされた。こゝに於て精神的に心機一轉して生れ更つた此精神状態は實に無明の闇夜より正覺の旭出で新たに生れ人格が一變しなされた。從來は人間の肉に生れたるもの生死の凡夫なりしが永生の聖者と更り、此に至て見れば肉體の上には異つたことなけれども精神上に大革新した。之を有餘涅槃と云ふ。有餘とは餘依として此依身を指すなり。此依身は替らざれども精神が更あらたまりて。精神更まり來つて觀れば宇宙全體がまた新たに白日青天、從來の娑婆の闇宅に在りし人が蓮華藏界光明裡の人となる。涅槃とは生死を超たる永恆常樂の境界にして極樂とも云ふ。即ち常住安樂自在清淨の靈界にして、諸の聖者の心靈の安住する處、實には客觀界に認識すべき處にあらずして主觀界に實觀すべき直觀の靈界である。此靈界に種々無量の莊嚴何とも云ふべからざる至善

至妙の境界が在る。

實を尅して論ずれば人の精神の最奥底を開きて圓滿に靈的に完成したる人の精神世界である。此光明主義の理想とする處の心的成就の極致である。

既に精神が宗教に依つて一轉し來れば此れ靈に生れ更りしなり。然れども此肉體の有らん限りは自然の生理あり制裁を免れず飢寒困苦なきにあらず。

彌々此依身の報命盡きて分解するに及んでは、心靈は會つて理想的に安住したる靈界が實現し來る永恒常樂の寂光土が現はれ來る。諸の聖者諸佛の常住に住し給ふ理想の妙境界、即ち常樂我淨の園に眞善微妙の花咲匂ふ所、生死諸の苦惱脱して自然微妙の樂土の故に極樂といひ、また無量光明土とも智慧土とも常寂光とも種々の麗はしき名を以て表せらるる處、是光明主義の最終の目的と爲る處である。

無住處涅槃とは、生死に住せず涅槃に住せず、永恒常住に、一方には涅槃界に安住して、また一面には生死界に分身應化して、衆生濟度の事業未だ會て暫くも懈廢せざるなり、故に無住處涅槃と云ふ。

大光明中の生活

宇宙全體悉く如來大光明中ならざるはなく、其の大光明中に在つて其の中に自ら二面ある。宇宙は一面よりは自然界、他面は心靈界、前者を娑婆といひ後者を淨土と名づく。娑婆本より大光明中である。具存とは娑婆にも淨土にも如來の心身充滿せぬ處なし、光明照らさぬ處なく、如來を離れて娑婆の實體はない。然して衆生は本來如來の子である故佛性具つて居る。而して本願の光明に攝取せられ同化せらる時は身は娑婆に在つて神々きは光明の生活である。然れ共身は自然に縛せられて娑婆に在るも理想だけは光明中の人、淨土にすみあそぶ想あり。然して後命終る時は今まで理想に觀じて居つた光明界が今度は實現となるのである。

であるから形から見れば娑婆と淨土と異れども精神から見れば何れも同じ如來光明中である。大光明中に在り乍ら肉眼は娑婆を見て居る。宇宙同一の如來中に娑婆と淨土の實體にかはりはないのである。それは法界の眞實義なのである。善導大師、元祖大師にもそれは確かに現れて居つたのである。

けれども衆生が分からぬ故に方便して宇宙が全く二つあるやうに教へたのである。

此土入聖はわけが異がう。一切處如來の光明中であるから現在から光明中の生活になるのが圓具教である。さればとて全く無比莊嚴の淨土無しと云ふのではない。全くあれども十方に徧在して如來心と相應すれば經驗が出来るので、實驗できぬとも大光明中の生活とはなられる。

次に眞宗は、信心歡喜乃至一念至心廻向即得往生住不退轉と。信心獲れば此身此のまゝ即得往生。これ矢張圓具教の一分である。死なねば往生出來ぬと云ふのは超然主義である。

また圓具教には、精神には現在ながら光明生活で、眞實莊嚴の淨土往生は身の死後である。

人生は豫備科

吾淨土の勧めとて、強ちに唯極樂にゆきて後、七寶の宮殿を栖み家として、百味の飲食を貪る爲に往生を欣ふといふ主義にてはなし。それらのことは枝末の事にて、兎まれ角まれ、先づ阿彌陀至尊に歸し、極樂を求めよといふ旨趣は他に非ず、阿彌陀尊即ち自己本來の家父に遇ふので、極樂とは即ち

自己の本家にてぞある。元來人の精神はは何もぞ、何處より出で來りしや、自らよく究めて了解し、全體自己はは何もので有るか御存じで有るか。自己は是十四元素の化合物にして、念の入りたる土人形同様なものでせうか。將た雑多の元素より成立つた有機物でせうか。それは見ようによつて、それだけの物にも見れば見ゆるのです。いま少し進んで人間を見れば、人には營養生殖器ありて、其肉を養ひ世嗣を製造し、犬や馬よりも體軀や神經の構造も巧であつて、隨て生活の度も高いのであり、それも唯肉を養ひ、世嗣を造るだけにて人事已るとすれば五十歩百歩、少し進化した動物にて犬馬の兄とか姉といふまでのことだらう。それだけに見ればそれだけにも見ゆる。またそれだけの人間も澤山あるのである。また少し進んで人間は歴史的動物ともいへばいへるのであり、また地層に増殖する物器械ともいへばいはるゝ。または地球を莊嚴する處の活人形ともいはれないこともない。唯肉體についてのみ人類の資格を定めたならばまことに價値のないものである。

また宗教的人類として人間を見るときは、人間には靈智靈能、他の動物よりも精神作用が遙かに進化してあれば、此人間は天國に入るまで、豫備の生活として、活動すべき動物にして、靈の方面に尤もよく發達せねばならぬ。しからざれば生涯の作爲は地獄の薪木を積む計りであるといふべし。

また人類は、極樂といひ、また眞理の靈界とも寂光土とも云ふべき無限の眞理を覺り得る全智全能の極を得らるべき最終眞理の聖域に入る全知を與へらるゝ大學に進入すべき豫備科とも云はるゝ。そこで先にいひし極樂は自己本來の家父にあはん爲とはいかなるわけならば、元來人生は何れより生れ來しや、天より降りしや地より湧きしや。全く母の胎にて初めて靈魂も成り立しと思ふや。何にしても自己あることは疑へないので、自己全體何者なるか。また自己の出處を知らず、自己の家父をしらず、これを迷といはずして何といひませう。阿彌陀至尊こそ本來の家父にてぞましますを、何とか方便をもつて親にあひなされ、父をたづねなされ、元來父の中においてあまり近いのでわからぬのでは有りませぬか。實際の父にあふて、はじめて自己の眞面目を見るのである。自己の心源を覺り得るのである。若しもひよつと父のかほを御見なされ、そのときのうれしさ、よろこばしさ、筆に記されませうか、言葉にのべられませうか。

眞の父にあふときのうれしさ、物にたとへられませうか。自己の眞面目を見た時の容子他に示されませうか。マア自分で見るより外にみてやある。したならば、従前の自己とはどこやらかはりて、しよめの空晴れわたりしごとくに、無量のひかりのなかなる自己であつて、これまで三界迷妄の窮子

でありたることを自覺するでせう。自己全くその無限の光壽の分子にして、無限の光壽全く自己の父たることが意識せらるゝでせう。

また先に申ました如く、自分の靈に就ての資格を定めなされ。阿彌陀を頼むといふのは何故とならば、先づ自己を化學的生理的動物とのみ見ずして、高等なる宗教的人類として、この一生は無限の眞理を自然に悟り究むべき極樂即ち淨土の大學に入校すべき準備の精神生活にして、自己の信仰と實行の行爲とは畢生の最後の驗定に及第と落第とは公明正大なる眞理の料場に顯はるのである。自己は先づその大學に入るための精神生活たる生涯なりと確かに決心したるが安心出來たといふのである。

吾が淨土の教とて外の物でない。人々うけ來つた精神を開きて自己の父にあふまでのこと。さればとて死してのち始めてあふといふことではない。精神は生れながら持ち來りしに非ずや。精神の眼が開けばいつでも安心する。天地一ばい何處か父の在さざる處あらん。若しも一たび見たならば、どうして昔は見へなかつたであるかと、それこそかへつてふしぎに思はるゝであらう。

寂光土と極樂

寂光土といへば高くおもひ、極樂といへば、よりは卑しきものに心得る向もある。それは天臺など四土を立て寂光は高く極樂は次のように判釋されてある。

けれども、判釋するものはどうにでもなる。また見ようによつてはだうにでも見ゆる。むかし地と太陽に於て地は大きくて太陽は地球を照す一個物の位に見てをつた。かはりて今日では太陽中心説が勢力あるようなもので、昔のまゝの判じかたをどこまでも固執して居るは愚の至である。そこでいま寂光と極樂とは、實際は四土の階段に見るよりは、同體の方面と見た方が適切である。何にしてもこの天然現象界は宗教にては未だ發展すべき性能と脱却すべき素質とが有るものと見る。

而て之を超越し開展したる宗教意識が遊入する處は眞理の靈界にして、眞なり善なり美なり。この眞善美の方面に眞理の神は在ますとし、それを最終の目的として欣求すべきのである。この天然の方面は穢とし染とし有限なる個々なり。眞理の方面は清淨土なり無限なり絶對なりとし、その至眞至善

至美の靈界を天國とも、寂光土とも、極樂とも、または淨土とも名づけたのである。何故に斯く同じ境界を種々の名をもつて命じたのであるとならば、それは自然に（ ）またた人の方に心理的關係があるので、其最終の眞理の靈界を名づくるに、若し之を感覺的に云はば清淨國土といふて感覺的至美を表明したので、極樂とは感情的に、感情の中に最も靈福を表するものは快樂であり、彼の靈界は熙怡快樂の極りである。此快樂の極とは感情的至美を示したので、矢張り至美、極樂の樂とは眞理の樂である。また寂光土とも、無量光土とも智土ともいふは、至眞の靈界にて知力的に命じたもので、其靈界は唯眞智靈智の至り智慧光を以て世界とし、交徹靈知の妙境にして心と境と致一であると、知力的に示したのである。無爲泥洹(ゆゑん)の土とは意志に名づけたのである。至善の靈界は至高善の極にして、自然無作(むさき)の意作にして、一切の作意を超越した處、無作(むさき)の作、無爲の爲にして、本來靈明不可思議の妙處を無爲泥洹と名づく。また蓮華藏世界といふも極樂の異名にて、これは譬喩を以て至妙の靈界を示したるなり。そは天然を開發したる、即ち蓮華の開きしごとく天然意識を開發して靈界に入て始めて意識すべき境界なるを以て蓮華藏と名づく、一切含藏の義である。無量光明土に含藏せるものは無量なり、無量光土即ち華華藏土なり。藏は如來藏法身藏。開發すれば即ち無量光明土

なり。

又密嚴世界とは、天然の人には、感覺世界の外は肉眼を以て見る能はず、天然の人には秘密にして思議す可からず。已に信心開發して眞理靈界の方面に入るものの莊嚴微妙不可思議なるを以て密嚴世界といふ。その他數多の名ありと雖ども至美の靈界を表明したる異名に他ならざるなり。

靈界の異名。清淨土——感覺的。極樂——感情的至美。寂光土亦智土——知力的至眞。無爲涅槃界——意志至善。譬喩的に蓮華藏世界。秘密的に密嚴淨土。

西方の意義

西方十萬億土を過ぎて極樂ありと、然る時は天然科學に衝突する。何れの處に極樂世界有ることを證すべけん。

宗教に天然の宗教と超天然とあり。佛教は天然の宗教にあらず。淨土何ぞ自然界に發見することを得ん。佛教は精神的宗教なる故に、精神開發せば、極樂元來去此不遠。然れども天然と發展せる精神

の懸隔、十萬億土も音ならず。已に開展して彌陀を見奉る時は十方法界及虚空界一切處として極樂に非るなきを知らん。

西方とは終局の表語にして方處に非ず。東方を發心とし、西方を究竟とし、終局目的眞理の歸處とす。是符號に他ならず。また西方と定めたるは、歸處を日没に示して、思を一方に傾けしめ、意志を一にせしむるため、また日没の懸鼓の朗日輝を收めて欣慕の感情を傾けしむるに適する故なり。

あらたのし無爲ないぢんの都にはのどけさ有無をはなれてしかば

むらさきに匂ふ入日のさまなくば何にたとえんきよきみくにを

とこしへに照るみひかりの中ながら知らぬは己がやみにぞありける